意思表示の図れない利用者への支援

――語られないシグナルを読む――

専修大学　西角純志

1　目的

この報告の目的は，「意思表示の図れない」利用者の支援の在り方を検討することである。「意思表示の図れる」利用者は自己決定によってサービスの選択をすることができるが，「意思表示の図れない」利用者は，サービス内容が不本意であったとしても声をあげることができない。そこで本報告では，利用者のコミュニケーションを類型化することで福祉施設における〈意思表示の図れない利用者支援〉の在り方の事例検討を試みることにしたい。

2　方法：利用者コミュニケーションの類型化

コミュニケーションには，通常，音声による「言語的コミュニケーション」と音声によらない「非言語的コミュニケーション」がある。本報告では，コミュニケーションを次の６つの区分に類型化した。すなわち①「通常の言葉」②「一語文での対話」③「奇声的な発語による意思伝達」④「ジェスチャによる意思伝達」⑤「他者からの言葉に反応」⑥「他者からの言葉かけに無反応」といった分類である。コミュニケーションの現状を細分化することにより，利用者の意思表示の在り方をより明確にできる。

3　結果

上記の①，②，③，④の類型は「意思表示の図れる」利用者であり⑤，⑥は「意思表示の図れない」利用者である。利用者の意思表示の仕方は様々であり，必ずしも６つの類型に収まりきれるものではなく重複する場合もある。これらのコミュニケーションのうち，①，②，③は「言語的コミュニケーション」であり⑤，⑥は「非言語的コミュニケーション」である。④は，通常では「非言語的コミュニケーション」に分類されるが， 自らの意思で自己決定，自己表現ができるため「意思表示の図れる」利用者に分類した。利用者支援においては、いわゆる「言語的コミュニケーション」より「非言語的コミュニケーション」がより重要である。支援者には「言語的コミュニケーション」と「非言語的コミュニケーション」の狭間にある《語られないシグナル》を読み取ることが求められているのである。

4　結論

「語られていないもの」と「語り得ないもの」の間には，言語によって表現できない「深層心理」の世界がある。そして「深層心理」の世界は「無意識」によって規定される。フロイトは，「無意識」を意識の起源ではなく，意識が負う外部から事後的に発見されるものだとした。「抑圧されたもの」が「心的外傷」として回帰してくるというのである。すなわち，抑圧された「内的な自然」が「叫び」となって産出＝表出されるのである。利用者のある種の奇妙な声も「産出された自然」、すなわち「叫び」に他ならない。声をあげたくてもあげられない， 声を出したくても出せない利用者の葛藤や苛立ち、そのような声を救い上げることが大切なのだ。

文献

西角純志, 2012,「沈黙の叫びー絵画と現代思想」『アリーナ』(13), 風媒社, 275-278.